

花田比露思著

花田比露思歌集第三卷
あけび叢書第百六十卷

歌集

茅野

短歌新聞社

歌集 ^{かや}茅 ^の野

平成 8 年11月 7 日 初版発行

著 者 花 田 比 露 思

編集者 林 光 雄

〒154 東京都世田谷区弦巻1-24-19

発行人 石 黒 清 介

印 刷 (株)キャップス

発行所 短 歌 新 聞 社

〒166 東京都杉並区高円寺南4-43-9

振替口座 東京00150-4-21683

電 話 0 3 (3312) 9 1 8 5

定価 3,500円 (本体 3,398円)

序

花田先生は私の生涯のある時期に常時、接触・高教を忝うした恩人の一人で忘れがたいおもい出を今に持ちつづけていた方であつた。御晩年はほとんど拝眉の機なく打過ぎてしまい何とも申訳ない次第である。

花田先生とは歌人比露思として出あい、大五郎教授として親炙した。

はじめてお会いしたのは大正十三年春であつた。東大の学生であつたわれわれは文学部学生を中心に東大短歌会をつくることになり、旧制八高の同窓で八高短歌会を一しょに創立して名古屋時代作歌活動を共にした国文の

亡き児山信一君と協力した。私は経済学部 of 学生であったが、しょっちゅう文学部の講義を聴きにいていた。当時島木赤彦先生に師事して「アララギ」に小杉茂として作品を発表していたが、父石樽千亦の関係で「心の花」の編集のお手伝いもし、他派の諸歌人にも知り合いが多かったので、東大短歌会のような超結社のあつまりには恰好であつたのであろう。その第二回の会合に花田先生をお迎えして選評を願うことになった。そのお願いにはじめて花田先生のお宅を訪問し、あと御礼にあがつた。学校はちがうが原真弓君と一緒にいったように記憶している。これが先生との出あいであつた。当時比露思の名でよく新聞の政治面の左下の方に時事詠が発表されていた。根岸短歌会子規嫡流を以て任ぜられた先生のむ

しろさばけた温顔に接した。夫人にもはじめてお目にかかった。震災後の東大のいまの工学部にちかい学生集会所の一室でひらかれた歌会には東大学生のほか、当時評判であつた文学部の女子聴講生群もはなやかないろどりを添えて集まつた。学生の中には中野重治、藤田徳太郎、森本治吉もいた。花田先生のむしろ地味な歌評に活潑な質問も出た。私はこの歌会ではじめて美代子と出あつた。国文の女子聴講生で紫の袴をはいた和服姿であつた。藤田君か児山君かに国文の方は皆出席するようにすすめられて出たとはあとから聞いた。花田先生にその日のことをお話したのは大阪にいつてからだとおもう。あたたかい笑でうなずかれた。

その後先生は京都へ移られた。京都大学の学生監にな

られたと知ったのは京大に騒ぎがあつて新聞に出たからだったとおもう。

昭和三年大阪市立高等商業学校が大阪商科大学に昇格、京大経済学部の河田嗣郎博士が初代学長に就任された。河田博士は河上肇教授の親友である。河田学長は関西の大学の常識をやぶつて京大関係のみでかためることなく全国からスタッフをスカウトされた。当時東大大学院で本位田教授の指導のもとオウエン研究をし専修大学教授をつとめていた私は夏は本位田先生や河合栄治郎教授が毎年いつておられた軽井沢の野沢の原の貸別荘に一家をあげて暮らしていた。河田学長はその軽井沢に本位田先生を訪問され東大関係の門下推薦を頼まれた。一足ちがいで学長にはお目にかかれなかったが、私の大阪行

が内定した。ただそのころ私は当時の綜合歌誌「短歌雜誌」に例の長篇歌論「短歌革命の進展」を掲載中であり、茂吉の反批判等騒然としていた。秋深い夜突然花田先生から御連絡があり、神田の学士会館の大談話室でお会いすることになった。先生は大阪商科大学学生部長花田教授として学長の代理として、内定した一人の若い教師の思想調査（？）に來られたのであった。一別以來のお話は堅くるしくはじまり、すぐ和やかな話題に移った。先生が新聞記者時代のこと、如是閑たちと行動を共にしたときのお話なども承った。どういう報告を花田先生が上司にされたかは知らない。しかし私の大阪赴任はそのまま実現した。先生の御懇情のあつたことは今おもっても沁みてかえりみられるのである。

私は大阪商大経済史研究室の一員になった。主任は一般経済史と東洋経済史講座の田崎仁義博士（いま東京で八十八歳で元気）。花田先生は日本思想史担当で研究室の副主任であつたが、本館の学生部長室に主としておられ、研究室にはほとんど見えなかった。学長は有数のリベラリストで、教学行政ともに高い成果をあげて建学され、在任中逝去されたのは何とも残念であつたが、花田先生はその成果に力をつくされた。

田崎主任教授が在外研究途中英国で発病、帰朝されると席順からは当然花田先生の外遊とおもわれた。しかし先生は辞退された。たまたま「ロバート・オウエン著作史」を脱稿印刷中であつた私が代つて海外留学を命ぜられた。学長の研究成果顕彰のため若いものの抜擢という

ことが表面にいわれて、あらわには全然出なかったが、私には花田先生の御懇志がつよく流れているのを切に思ふものである。

まもなく大阪商大の同窓会関係に多少の動きが見えるとおもったとき、花田先生は大阪を去って旧制和歌山高等商業学校長（いまの和歌山大学）に栄転された。河田学長がまだ御在職中のことである。栄転ではあるが、私は何かもやもやしたのを感じた。後に和歌山の校長官舎を訪問した。御留守で奥様とお話していると先生が帰っていらった。この頃は肩がこってつかれてこまると先生がいつもいつているのですよと話された奥様の御様子をお忘れな。

香里のお宅へもあがったが、その記憶はうすい。

九州大学で学会があつたとき、福岡商大の校長公舎を訪問したことがある。しかし御留守で先生にはお目にかかれなかった。大分大学長のときにも、その後もついに拝眉の機を失してしまった。御無沙汰を続けたのである。

宮中御歌会始に美代子が選者を仰せつかつていたある年のこと。花田先生は歌人としての長く高い御閱歴から召人の御榮譽に浴された。先生の御歌風をおもい、およろこびをおもった、私たち兩人とも感激充つるおもいであつた。

先年大阪市立大学の杉本町校舎で進駐軍からの校舎返還直後に社会経済史学会年次大会が開かれた。ここは昔の大阪商大である。研究室の翼屋は昔のままにのこつて

いた。私は草生を踏んでそのまわりをあるき、二階の角にあつた経済史研究室を仰いだ。油然とわくおもいの中に花田先生の壮年らしい御風貌も浮かんたのであつた。なぜ、その時、先生に手紙をさしあげなかつたのであるうか。今にして悔やまれるのである。

昭和四十三年初冬

五島 茂

歌集茅野総目次

序	五島 茂
昭和七年	一五
短歌（百二十一首）	
昭和八年	四一
短歌（百四十七首）	
昭和九年	七三
短歌（三百二十二首）	
長歌（一首）	
短詩（三篇）	
昭和十年	一三一

短歌（三百一首）

長歌（一首）

旋頭歌（六首）

詩（二篇）

昭和十一年……………一八九

短歌（二百四十七首）

長歌（五首並に反歌九首）

旋頭歌（十九首）

詩（四節）

昭和十二年……………二四五

短歌（二百三十七首）

あとかき……………二九〇

短歌	千三百八十二首
長歌	六首
反歌	九首
旋頭歌	十九首
詩	八篇

茅

野

